

忘れ語り、いま語り

不安は数量化できない

震災から五年ほどが過ぎていたか、『同朋』という雑誌に、こんなエッセイを寄稿したことがあった。不安ということについて、何か考えてみたくなって書いたものだが、誰かに読まれたという形跡はない。

いよいよ混迷が深まり、ふくしまの声について語る事がむずかしくなっている。唇が寒い。そうして、そこには沈黙の、それゆえに忘却の共同体が生まれつつある。あたかも何もなかったかのように。

いつしか風評被害という言葉が、奇妙に振れながら、多様な小さき声を封じ込めるようになって久しい。この言葉が、小さき声の群れを敵か味方かに分断するために、絶妙な力を発揮している。それはとても見えにくい抑圧性や暴力性をもって、声の検閲を行なう。たとえば、風評被害を助長すると認定されると、ただちに敵の声として排除される。そこに、情緒的という言葉をかぶせてやれば、揺るぎない優位性が確保できると信じられている。

放射能や放射性物質は見えない。色もない、形もない、重さもない。線量計によって数量化することなしには、その存在すら捕捉できない。不安がつきまとうのは当然だ。不安はけっして数量化することができない。情緒的であるに決まっている。不安は情緒そのものである。

数字はしばしば、客観性やら学問的な装いやらを凝らしながら、巧妙にウソをつく。人を去勢する。そんな場面をくりかえし目撃させられてきた。数字を掲げて巧みに他者を批判する者が、なんとも稚拙に数字をこねくり回す姿に遭遇して、脱力感に襲われる。ふくしまの声は数字に踊らされ、翻弄されてきた。それが原発事故以後の五年の年月ではなかったか。

だから、とうてい、ふくしまの声など語ることはできない。だれも代弁者にはなれない。そのことの自覚からしか始まらない、ということの確認から始めるしかない。

恥じらいなしには語れない、などと言えば、笑われることだろう。しかし、眼には見えないモノと対峙することを、日々強いられている場所では、恥じらいの有無こそがリトマス試験紙になるのかもしれない、と思う。

いや、放射能ばかりではない。見えないモノは、あちらにもこちらにも転がっている。分厚く堆積している。この世界には、こんなに見えないモノがあふれているのか。そのことに気づかされたのも、震災のあとのことだ。少しだけ賢くなったか。

ともあれ、それでも、語ることをやめるわけにはいかない。